

岡山市場を中心とした主要切花の動向と特徴

大 江 輝代子

Recent Movement of Cut Flowers at Okayama Central Wholesale Market

Kiyoko OHE

緒 言

近年の花き需要の順調な増加に対応して、全国で花きの生産振興が積極的に行われている。このため、産地間競争は激化し、花き市場は売り手市場から買い手市場へ移行しつつあるとさえいわれている。このような状況において、花き生産者はより市場適応的なし市場創造的な生産・出荷を行う必要がある。

そこで、本報告では岡山県内の花き生産者・産地への参考に供する目的で、最近数年間の岡山市場における切花の需給動向を分析し、その特徴を明らかにする。すなわち、第1に、大都市市場である関西・東京市場との比較によって、岡山市場における各切花品目の動向の特徴を抽出する。第2に、岡山市場のキク、カーネーション、バラ、洋ラン類などの基幹品目を形態や花色によって分類し、種類別の需要傾向を把握する。そして、以上の分析から、県内の産地が岡山市場を標的市場として出荷しようとする場合の留意点について若干の提言を行う。

取りまとめに当たり御指導いただいた、当场経営調査部長甲田 齊氏、野菜・花部専門研究員鴻野信輔氏に対して感謝の意を表する。

分析の対象および方法

1. 岡山・関西・東京市場における切花の需給動向

分析の対象切花品目は、「岡山県花き生産振興計画—岡山花物語」(1989年策定)に取り上げられている重点推進品目および地帯別推進品目(合計13品目)である。また、対象市場は地方都市市場である岡山市場(岡山市中央卸売市場 1989年の切花総取扱金額は41億円)、大都市市場である関西市場(大阪府、京都府、兵庫県にある花き卸売市場の合計 1989年の切花総取扱金額は392億円)、東京市場(東京都にある花き卸売市場の合計 1989年の切花総取扱金額は450億円)の三者である。

1986~1989年の岡山・関西・東京市場のデータを用いて、次の三つの方法で需要動向の分析を行った。

まず、1986~1989年における切花総取扱金額および対象品目ごとの取扱金額の年平均伸び率を算出し、これまでの取扱金額の伸び率から今後の伸びを予測した。

次に、1986~1987年、1988~1989年の2期に分けてそ

れぞれの期間における対象品目の特化係数(各市場の切花総取扱金額に対する各品目ごとの構成比を全国の市場の合計における同構成比で除した値)を算出し、各品目における構成比の大小とその変化を検討して市場ごとの特徴を把握した。

最後に、1986~1989年において取扱数量が単価に与える影響を示す弾性値(取扱数量が1%増加・減少することによって単価が何%上昇・低下するかを示す値)と相関係数を算出し、各品目の需給動向を予測した。なお、弾性値は、年取扱数量(x)と年平均単価(y)の関係を両対数回帰式($\log y = a + b \log x$)で求められる傾き(b)で示される。

2. 岡山市場におけるキク、カーネーション、バラ、洋ラン類の種類別動向

1984~1989年の岡山市場のデータを用いて、次の6つの方法によって分析を行った。

第1に、各品目に占める各種類の金額割合を年ごとに求め、種類別の取扱金額割合の大小とその増減傾向を検討した。

第2に、各種類の取扱数量を月ごとに6年間平均して指数で表した季節指数を求め、月別入荷量の変動パターンの種類による違いを明らかにした。なお、季節指数の計算式は次のとおりである。

$$i \text{ 月の季節指数} = \frac{6 \text{ 年間平均した } i \text{ 月の取扱数量} \times 100}{6 \text{ 年間平均した年取扱数量} \div 12}$$

(i = 1 ~ 12)

第3に、各種類の月別単価を6年間平均し、月別単価の変動パターンの種類による違いについて明らかにした。

第4に、年と月ごとに取扱金額の年平均伸び率を種類別に求め、種類や時期による伸びの違いを明らかにし、今後の取扱金額の伸びを予測した。

第5に、年と月ごとに取扱数量が単価に与える影響を示す弾性値と相関係数を種類別に求め、それぞれの今後の需給動向を予測した。

第6に、「岡山県花き生産振興計画」で岡山県内市場における県内産花きの供給率向上が課題になっており、種類別に県内産、県外産、輸入品の6年間平均した金額シェアを求め、県内産花き供給率の現状と今後の供給率向

上の可能性について検討した。

分析の結果および考察

1. 岡山・関西・東京市場における切花の需給動向

(1) 取扱金額の年平均伸び率

岡山・関西・東京各市場における切花総取扱金額、品目別取扱金額の年平均伸び率は第1表のとおりであった。

切花総取扱金額の伸びは、東京市場の5.11%が最も大きく、次いで関西市場の4.51%、岡山市場は3.79%であった。このように岡山市場は大都市市場と比べて取扱金額の伸びが小さかった。

品目別にみて5%以上の伸びがみられたのは、岡山市場ではトルコギキョウ、スターチス、関西市場ではトルコギキョウ、スターチス、宿根カスミソウ、バラ、東京市場ではトルコギキョウ、スターチス、コギクがあげられた。このなかでトルコギキョウは3市場とも伸びが大きい、その伸びには大きな市場間差がみられ、東京 > 関西 > 岡山であった。

(2) 取扱金額の特化係数

3市場の特化係数は第2表に示すとおりであった。

特化係数0.9~1.1を全国平均並とし、1.1以上を特化しているとみなした場合、次のような特化傾向がみられた。特化係数1.1以上の品目は、岡山市場では両期間とも2品目(コギク、アイリス)、関西市場では1986~1987年に4品目(コギク、シャクヤク、トルコギキョウ、スターチス)、1988~1989年に3品目(コギク、シャクヤク、トルコギキョウ)、東京市場では両期間とも6品目(カーネーション、バラ、フリージア、宿根カスミソウ、シャクヤク、トルコギキョウ)であった。

このように、岡山市場は関西・東京市場と比べて特化品目が少なかった。また、岡山市場の特化品目であるコギク、アイリスは東京市場では0.9以下、東京市場での特

化品目であるシャクヤク、トルコギキョウは岡山市場で0.9以下であり、対照的な特化状況を示す品目がみられた。一方、関西市場では岡山市場と東京市場の特化品目とともに含まれており、両市場の中間の性格を持っていると判断された。

(3) 取扱数量が単価に及ぼす影響

3市場における取扱数量が単価に及ぼす影響についてみると、第3表のとおりであった。取扱数量と単価の関係が大きい品目(相関係数が0.5以上、-0.5以下のもの)を対象に検討すると以下のことが指摘できた。

3市場共通して、取扱数量の増加によって単価が下がる傾向がみられるものはアイリスとストック、反対に取扱数量が増加しても単価が下がる傾向がみられないものはバラであった。

次に市場別にみると、取扱数量の増加によって単価が下がる傾向にある品目は、先の共通品目以外に岡山市場

第1表 取扱金額の年平均伸び率(1986~1989)
単位: %

	岡山市場	関西市場	東京市場	全国平均
切花	3.79	4.51	5.11	4.84
キク	1.34	3.18	4.12	3.56
コギク	4.69	4.69	7.53	4.74
カーネーション	1.81	2.43	—	1.31
バラ	4.18	5.79	4.64	5.10
フリージア	—	—	—	—
グラジオラス	—	2.00	4.91	3.90
アイリス	—	—	—	—
ストック	—	—	—	—
リンドウ	4.78	2.90	4.88	4.46
宿根カスミソウ	4.96	5.96	4.84	5.24
シャクヤク	3.72	2.77	3.30	3.16
トルコギキョウ	7.62	10.61	12.64	12.18
スターチス	7.30	6.19	8.87	7.97

注) 決定係数0.5未満の値は、傾向不明として「—」で示している。

第2表 取扱金額の特化係数(2年間平均)

	岡山市場		関西市場		東京市場	
	1986~87	1988~89	1986~87	1988~89	1986~87	1988~89
キク	0.85	0.82	0.84	0.84	0.91	0.92
コギク	1.27	1.34	1.10	1.14	0.59	0.65
カーネーション	0.80	0.83	0.94	1.00	1.23	1.11
バラ	0.94	0.95	0.88	0.92	1.41	1.36
フリージア	0.91	0.85	0.91	0.91	1.18	1.14
グラジオラス	0.68	0.66	0.90	0.84	0.95	0.98
アイリス	1.30	1.29	0.78	0.79	0.89	0.86
ストック	0.55	0.64	0.86	0.86	1.03	0.97
リンドウ	1.05	1.09	1.09	1.03	0.91	0.93
宿根カスミソウ	0.93	0.96	0.96	1.01	1.15	1.12
シャクヤク	0.60	0.62	1.54	1.55	1.27	1.25
トルコギキョウ	0.90	0.79	1.18	1.12	1.39	1.40
スターチス	0.75	0.75	1.11	1.04	0.96	0.99

ではキク、フリージア、シャクヤク、関西市場ではグラジオラス、東京市場でキクがあげられ、岡山市場での品目数が多かった。一方、取扱数量が増加しても単価が下がらない傾向の品目は、関西市場ではリンドウ、スターチス、東京市場ではコギク、フリージア、トルコギキョウ、スターチスがあげられるのに対し、岡山市場ではなかった。

以上の結果から、岡山市場は関西・東京市場と比べて①切花総取扱金額の伸びが小さく、取扱金額の伸び率が大きい品目が少ない②特化品目が少ない③取扱数量の増加によって単価が低下する品目が多く、低下しない品目が少ないなどの特徴がみられた。したがって、岡山市場は対象品目に関する限り需給が均衡状態にある品目が多いと考えられる。

2. 岡山市場におけるキク、カーネーション、バラ、洋ラン類の種類別動向

(1) キ ク

キクについて、形態で大輪、中輪、スプレーの3種に、さらに大輪を花色で白、黄、赤、色物（その他）に分け

て検討した。

常に大輪はキク取扱金額の90%前後を占めており、その中でも大輪・白、大輪・黄の割合は大きかった。また、1984～1989年の間に各種類の構成割合の大きな変化はみられなかった（第1図）。

大輪・白、大輪・黄、大輪・赤は入荷量の季節指数の変動が他の種類と比べて小さかった（第2図）。

キクの単価は大輪・白、大輪・黄、大輪・赤が他の種類と比べて高めであった。種類によって単価の高低はあるものの、冬期に高く、夏期に安いパターンはどれも同じであった（第3図）。

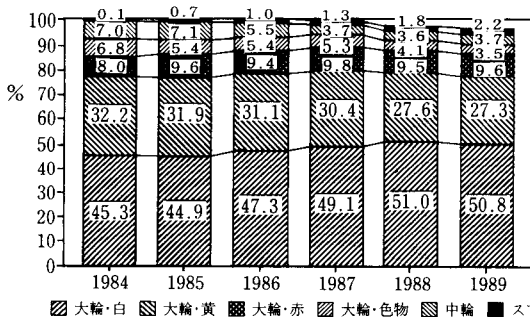
スプレーは年間を通じて取扱金額の伸びが他の種類より大きく、特に夏期において大きな伸びを示した。反対に大輪・色物、中輪は1年当たり5%以上取扱金額が減少した（第4表）。

スプレー以外の種類において夏～冬期に取扱数量の増加によって単価が下がる傾向がみられており、特に大輪・白、大輪・黄は単価の下落が大きかった（第5表）。

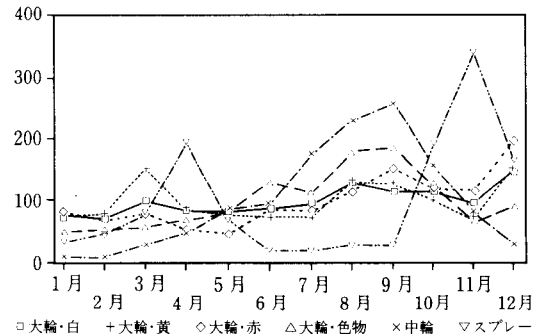
県内産の取扱金額のシェアが小さい種類はスプレーであり、反対にシェアの大きい種類は中輪であった（第4図）。

第3表 取扱数量が単価に及ぼす影響（1986～1989）

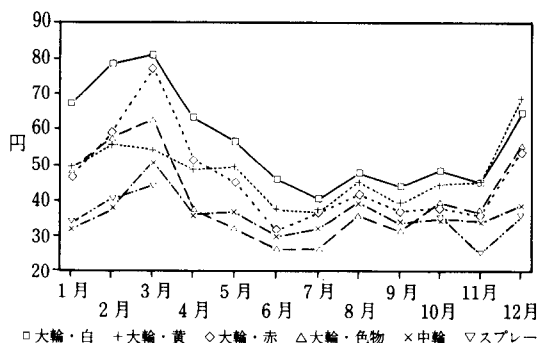
	岡山市場		関西市場		東京市場	
	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数
キク	-1.60	(-0.86)	0.70	(0.05)	-3.14	(-0.63)
コギク	-1.29	(-0.26)	1.11	(0.24)	0.98	(0.61)
カーネーション	0.71	(0.28)	-0.28	(-0.24)	-0.46	(-0.45)
バラ	1.38	(0.66)	0.93	(0.80)	1.18	(0.88)
フリージア	-0.85	(-0.90)	-0.01	(-0.00)	1.71	(0.57)
グラジオラス	-0.31	(-0.34)	-1.41	(-0.82)	0.54	(0.18)
アイリス	-1.01	(-0.98)	-1.05	(-0.87)	-1.25	(-0.92)
ストック	-0.53	(-0.57)	-2.00	(-0.97)	-1.05	(-0.75)
リンドウ	-0.02	(-0.03)	0.37	(0.83)	0.02	(0.04)
宿根カスミソウ	-0.63	(-0.41)	-0.63	(-0.28)	-0.48	(-0.49)
シャクヤク	-0.40	(-0.66)	-0.02	(-0.04)	-0.20	(-0.24)
トルコギキョウ	-0.11	(-0.13)	0.39	(0.41)	0.86	(0.72)
スターチス	-0.07	(-0.16)	0.51	(0.82)	0.64	(0.92)



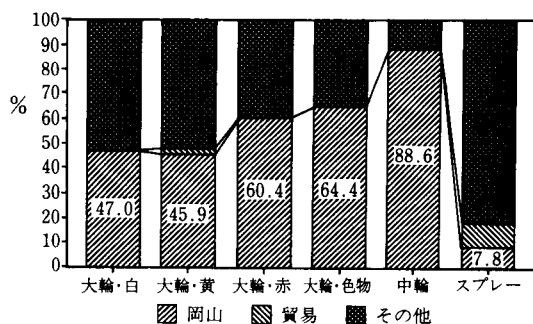
第1図 キク金額に占める種類別割合



第2図 キク入荷量の季節指数（1984～1989の平均）



第3図 キクの月別単価 (1984~1989の平均)



第4図 キクの入荷先 (1984~1989の平均)

第4表 キク金額の年平均伸び率 (1984~1989)

月	大輪・白	大輪・黄	大輪・赤	大輪・色物	中輪	スプレー
合計	2.17	—	—	-5.01	-7.37	17.33
1	2.50	—	—	-13.47	—	18.98
2	3.48	—	—	—	—	18.61
3	2.21	—	4.60	-8.48	-18.92	16.60
4	—	—	—	—	-21.90	—
5	—	-6.60	—	—	—	16.95
6	3.93	—	—	—	—	29.16
7	—	—	—	-7.95	-10.36	34.20
8	4.03	—	3.73	—	—	33.09
9	—	—	—	-5.56	-8.93	36.64
10	—	—	—	-7.72	-7.86	23.01
11	—	—	—	-7.10	—	15.96
12	—	—	—	-7.94	—	—

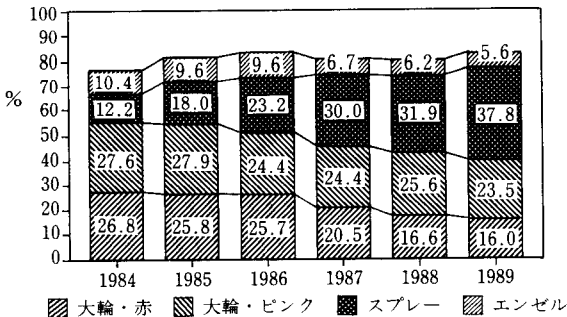
注) 決定係数0.5未満の値は、傾向不明として「—」で示す。

第5表 キクの取扱数量が単価に及ぼす影響 (1984~1989)

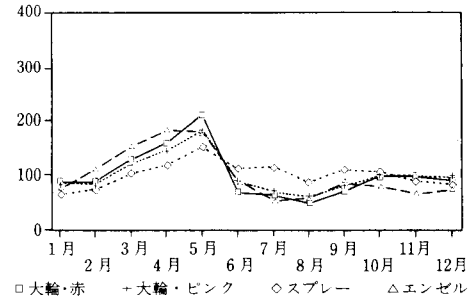
月	大輪・白		大輪・黄		大輪・赤		大輪・色物		中輪		スプレー	
	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数
合計	-0.74	(-0.31)	-0.29	(-0.57)	-0.27	(-0.31)	-0.25	(-0.87)	-0.15	(-0.45)	0.14	(0.53)
1	-1.13	(-0.70)	-0.51	(-0.38)	-0.24	(-0.32)	-0.18	(-0.92)	-0.13	(-0.38)	-0.10	(-0.52)
2	-0.22	(-0.15)	-0.60	(-0.53)	-0.63	(-0.73)	-0.41	(-0.75)	-0.07	(-0.16)	-0.08	(-0.24)
3	-0.54	(-0.48)	-0.88	(-0.89)	-0.09	(-0.13)	0.05	(0.12)	0.13	(0.52)	0.09	(0.29)
4	-1.74	(-0.80)	0.88	(0.49)	-0.02	(-0.02)	0.30	(0.40)	0.22	(0.58)	—	—
5	0.13	(0.18)	-0.29	(-0.77)	-0.08	(-0.33)	-0.40	(-0.56)	-0.10	(-0.16)	—	—
6	-3.08	(-0.83)	-0.55	(-0.73)	-0.31	(-0.56)	0.05	(0.09)	-1.02	(-0.92)	—	—
7	-2.60	(-0.89)	-1.88	(-0.74)	-0.84	(-0.64)	-0.32	(-0.43)	-0.25	(-0.32)	—	—
8	-1.86	(-0.81)	-1.34	(-0.87)	-0.54	(-0.47)	-0.68	(-0.92)	-0.37	(-0.57)	—	—
9	-1.43	(-0.84)	-1.54	(-0.87)	-1.11	(-0.65)	-0.39	(-0.59)	-0.27	(-0.65)	—	—
10	-2.45	(-0.94)	-1.08	(-0.90)	-0.76	(-0.41)	-0.51	(-0.70)	-0.38	(-0.56)	0.17	(0.54)
11	-2.92	(-0.77)	-0.82	(-0.82)	-1.21	(-0.71)	-0.23	(-0.34)	-0.87	(-0.86)	0.00	(0.00)
12	-1.29	(-0.54)	-0.77	(-0.56)	-1.22	(-0.63)	-0.16	(-0.38)	-0.54	(-0.38)	-0.11	(-0.27)

以上からキクについては大輪・白、大輪・黄、スプレーの需給動向に今後注目していく必要があると思われる。大輪・白、大輪・黄は周年安定供給されており、取扱金額の大きな増減もなく安定していると考えられる。また、これらは他の種類より単価が高いが、取扱数量の増加に

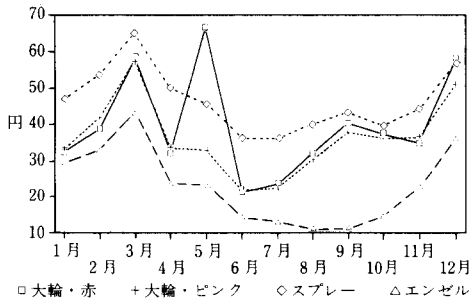
よって単価を大きく下げる傾向があるところから需給が限界に達しているの、むやみに出荷量を増加すべきではないと考えられる。スプレーは月別入荷量が夏期において極めて少なく、安定供給されていなかったことから、県内産シェアを拡大するためにも周年安定供給は重要な



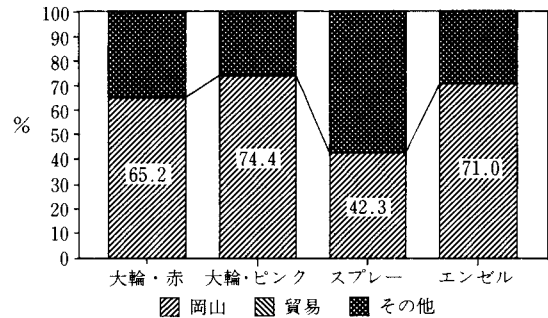
第5図 カーネーション金額に占める種別別割合



第6図 カーネーション入荷量の季節指数 (1984～1989の平均)



第7図 カーネーションの月別単価 (1984～1989の平均)



第8図 カーネーションの入荷先 (1984～1989の平均)

第6表 カーネーション金額の年平均伸び率 (1984～1989)

月	大輪・赤	大輪・ピンク	スプレー	エンゼル
合計	—	1.91	12.34	-3.19
1	-7.21	—	12.52	—
2	-7.77	—	12.22	-4.50
3	-3.82	—	12.52	—
4	—	—	8.18	-4.48
5	—	5.03	11.09	—
6	—	—	11.09	—
7	—	—	10.37	-18.11
8	—	—	14.17	-12.81
9	—	—	13.71	-3.87
10	—	3.65	15.60	—
11	—	4.88	15.00	—
12	—	—	13.77	—

注) 決定係数0.5未満の値は、傾向不明として「—」で示す。

課題であると思われる。

(2) カーネーション

カーネーションについて、形態で大輪、スプレー、エンゼルの3種に、さらに大輪を花色で赤、ピンクに分けて検討した。

近年になると大輪・赤、エンゼルは取扱金額の割合が減少し、スプレーは増加していた（第5図）。

入荷量の季節指数の動きはどの種類もほぼ同じで、周年安定供給されていた（第6図）。単価はどの種類も3、12月に高く、よく似た動きを示しているが大輪・赤のみ5月にも単価が高かった（第7図）。

スプレーは年間を通じて取扱金額が著しく伸びていた。大輪・赤、エンゼルは取扱金額が減少している月もみられた（第6表）。

大輪・赤の5～6月、大輪・ピンクの1～3月は取扱数量の増加によって単価が大きく下がっていた。スプレーは他の種類に比べて取扱数量と単価の相関係数が小さい月が多かった（第7表）。

スプレーは県内産の取扱金額の割合が他の種類と比べて小さかった（第8図）。

以上からカーネーションについては大輪・赤、スプレーの需給動向に今後注目していく必要があると思われる。母の日がある5月に単価が高くなる大輪・赤は、5月に取扱数量の増加によって単価が下がる傾向にあり、需要は限界に達しているの、むやみに出荷量を増加させるべきではないと考えられる。スプレーは取扱金額の伸びが大きく、取扱金額に占める割合が年々大きくなっており、キクのスプレーとは違って周年安定供給されており、単価は高かった。このようにスプレーは今後の需要の伸びが期待でき、県内産供給率の向上を図るべきであると

考えられる。

(3) バラ

バラについて、形態で大輪、ペビーの2種に、さらに大輪を花色で黄、赤、ピンクに分けて検討した。

大輪は取扱金額に占める割合が70～80%であり、大輪のなかでも赤とピンクの割合が大きかった(第9図)。

大輪は周年安定供給されており、どの花色も入荷量の季節指数の動きがよく似ていた(第10図)。

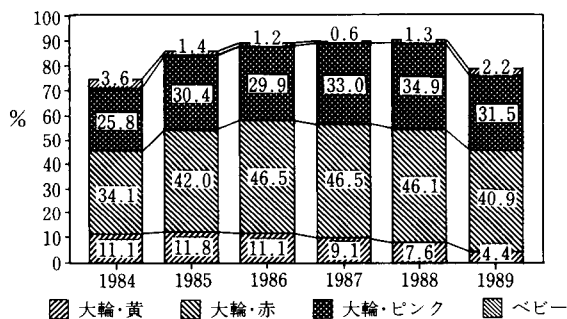
単価の動きはどの種類も似ており、12～3月に高く、6～8月に安くなるパターンであった。大輪・赤は冬期において他の種類より単価が高かった(第11図)。

大輪・ピンク、大輪・赤はほぼ年間を通じて取扱金額が伸びていた。大輪・黄、ペビーは取扱金額が減少している月があった(第8表)。

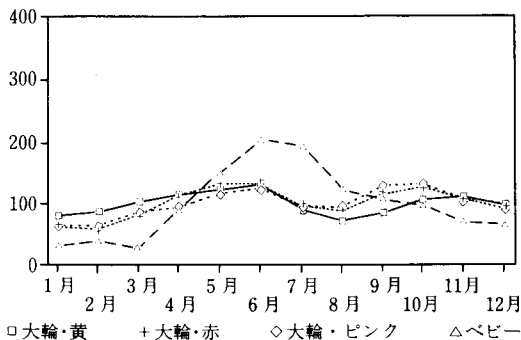
大輪・ピンクは冬期において取扱数量が増加しても単価が上がる月がみられた。反対に大輪・黄は取扱数量の

第7表 カーネーションの取扱数量が単価に及ぼす影響(1984～1989)

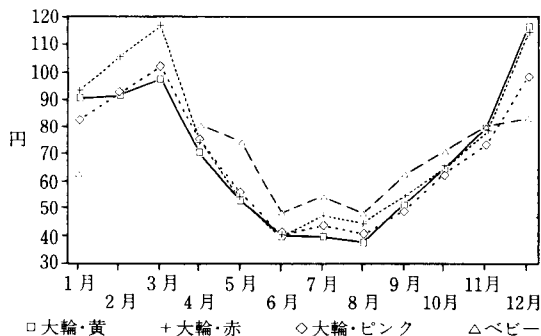
月	大輪・赤		大輪・ピンク		スプレー		エンゼル	
	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数
合計	-0.38	(-0.84)	0.08	(0.17)	-0.07	(-0.32)	-0.37	(-0.90)
1	-0.12	(-0.16)	-1.27	(-0.79)	-0.18	(-0.63)	-0.21	(-0.41)
2	-0.10	(-0.17)	-1.23	(-0.86)	-0.22	(-0.89)	-0.31	(-0.63)
3	-0.64	(-0.81)	-1.78	(-0.94)	-0.18	(-0.62)	-0.32	(-0.69)
4	-0.46	(-0.26)	-1.01	(-0.46)	-0.31	(-0.39)	-0.52	(-0.56)
5	-1.06	(-0.70)	-1.46	(-0.39)	-0.04	(-0.21)	-1.82	(-0.90)
6	-1.07	(-0.76)	-0.40	(-0.37)	-0.12	(-0.34)	-0.27	(-0.65)
7	0.20	(0.39)	0.06	(0.07)	-0.26	(-0.60)	-0.10	(-0.68)
8	-0.33	(-0.78)	-0.01	(-0.01)	0.04	(0.14)	-0.02	(-0.04)
9	-0.21	(-0.48)	-0.36	(-0.60)	-0.04	(-0.27)	-0.90	(-0.62)
10	-0.26	(-0.50)	-1.06	(-0.67)	0.06	(0.29)	0.02	(0.02)
11	-0.81	(-0.70)	-1.01	(-0.47)	-0.04	(-0.18)	-0.05	(-0.06)
12	-0.84	(-0.92)	-0.96	(-0.62)	-0.03	(-0.12)	-0.46	(-0.77)



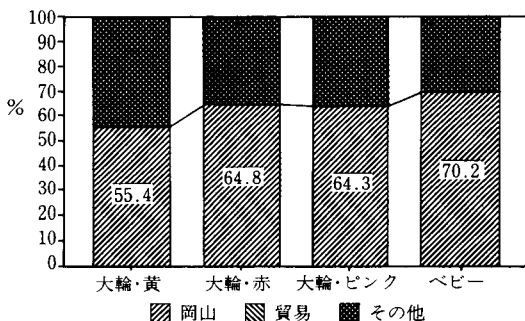
第9図 バラ金額に占める種類別割合



第10図 バラ入荷量の季節指数(1984～1989の平均)



第11図 バラの月別単価(1984～1989の平均)



第12図 バラの入荷先(1984～1989の平均)

増加によって単価が下がる月が多くみられた（第9表）。

バラはどの種類も県内産の取扱金額シェアが50%以上であり、キク、カーネーションと比べて種類による差が小さかった（第12図）。

以上からバラについては大輪・赤、大輪・ピンクの需要動向に今後注目していく必要があると考えられる。これらの種類は年間を通じて取扱金額の伸びがみられ、取扱数量の増加によって単価が下がる傾向が小さかった。したがって、今後も安定した需要が見込めると考えられ県内産供給率の向上が望まれる。

(4) 洋ラン類

洋ラン類について、オンシジューム、カトレア、コチョウラン、シンビジューム、デンドロビューム、デンファレの6種に分けて検討した。

シンビジュームとデンファレは洋ラン類のなかでも取扱金額が大きく、デンファレは1986年以降、取扱金額を伸ばしていた（第13図）。

入荷量の季節指数の変動が大きいのはデンドロビューム、シンビジュームで、冬期に入荷が集中していた。また、洋ラン類は種類によって季節指数の変動パターンが全く違っていた（第14図）。

単価の月別変動も入荷量と同様、種類によって違っていた。コチョウラン、シンビジュームは高い月と安い月の差が約650円であった（第15図）。

デンファレとコチョウランは年間を通じて大きな取扱金額の伸びを示した。また、オンシジュームは冬～春期、シンビジュームは夏期のそれぞれ入荷量の少ない時期に取扱金額の伸びがみられた（第16表）。

デンファレ以外の種類ではほぼ年間を通じて取扱数量の増加によって単価が下がる傾向がみられた。特にコチョウランとデンドロビュームはこの傾向が強かった（第11表）。

県内産の取扱金額のシェアが大きい品目はデンドロビュームとカトレアでシェアが小さい品目はデンファレとシンビジュームであった（第16図）。

以上から洋ラン類については年間を通じて取扱金額の伸びが大きいコチョウランとデンファレの今後の需給動向に注目していく必要があると思われる。コチョウランは取扱数量の増加によって単価が大きく下がる傾向があり、供給が需要を上回っていると推測できる。このような状況下においてコチョウランの単価を崩さないためには、出荷量をむやみに増やさず、高品質なものを出荷することが良策であろうと考えられる。これに対して、デンファレは取扱数量の増加によって単価が下がる月が他の種類と比べて少なく、今後の需要の伸びが見込めると考えられる。したがって、低い県内産の供給率を拡大していくべき種類であろうと思われる。

3. 分析結果からみた県内産地への提言

以上の分析より、岡山市場に出荷する岡山県の花き産

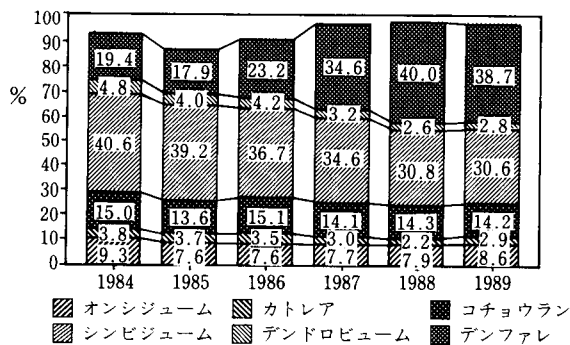
第8表 バラ金額の年平均伸び率（1984～1989）

月	大輪・黄	大輪・赤	大輪・ピンク	ペビー
合計	-4.22	5.08	5.78	—
1	—	6.30	5.14	-22.03
2	—	7.19	5.33	-19.56
3	—	8.33	6.54	—
4	—	—	3.97	—
5	—	5.07	6.97	—
6	—	4.34	6.86	—
7	—	—	6.52	—
8	—	6.58	7.85	—
9	-7.28	4.77	6.21	—
10	-8.58	4.75	4.48	—
11	-8.02	4.14	6.05	—
12	-8.09	4.90	5.06	—

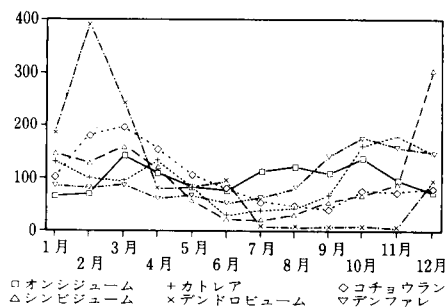
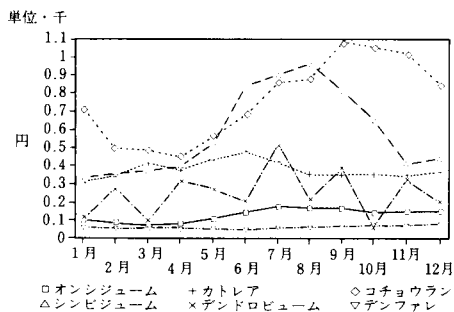
注）決定係数0.5未満の値は、傾向不明として「—」で示す。

第9表 バラの取扱数量が単価に及ぼす影響（1984～1989）

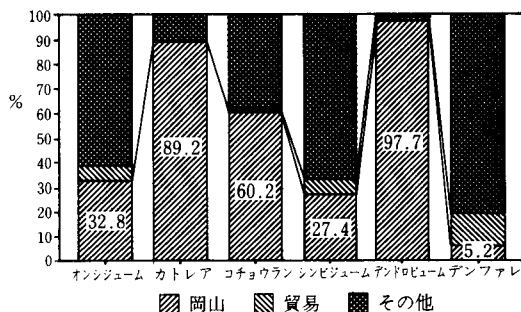
月	大輪・黄		大輪・赤		大輪・ピンク		ペビー	
	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数
合計	-0.26	(-0.97)	0.17	(0.60)	0.27	(0.66)	-0.05	(-0.21)
1	-0.09	(-0.28)	-0.06	(-0.25)	0.08	(0.22)	0.00	(0.01)
2	0.04	(0.17)	-1.10	(-0.56)	0.11	(0.55)		
3	-0.16	(-0.23)	0.11	(0.37)	0.51	(0.68)		
4	-0.09	(-0.46)	-0.09	(-0.30)	0.07	(0.14)	-0.28	(-0.58)
5	-0.38	(-0.85)	0.51	(0.20)	0.36	(0.21)	-0.14	(-0.59)
6	-0.38	(-0.92)	0.01	(0.03)	0.24	(0.42)	-0.75	(-0.73)
7	-0.17	(-0.56)	-0.34	(-0.48)	-0.05	(-0.14)	0.06	(0.16)
8	-0.21	(-0.44)	0.00	(0.01)	0.25	(0.43)	-0.04	(-0.09)
9	-0.20	(-0.75)	-0.24	(-0.56)	-0.12	(-0.44)	0.06	(0.15)
10	-0.23	(-0.74)	0.00	(0.00)	-0.42	(-0.45)	0.07	(0.32)
11	-0.28	(-0.88)	0.68	(0.71)	0.71	(0.68)	-0.01	(-0.07)
12	-0.19	(-0.78)	-0.14	(-0.23)	0.22	(0.33)	-0.02	(-0.18)



第13図 洋ラン金額に占める種類別割合

第14図 洋ラン入荷量の季節指数
(1984～1989の平均)

第15図 洋ランの月別単価 (1984～1989の平均)



第16図 洋ランの入荷先 (1984～1989の平均)

第10表 洋ラン類金額の年平均伸び率 (1984～1989)

月	オンシジューム	カトレア	コチョウラン	シンビジューム	デンドロビューム	デンファレ
合計	6.39	—	6.18	3.33	3.33	14.29
1	19.17	6.79	4.43	2.38	—	16.23
2	13.30	—	5.18	2.99	—	15.72
3	—	—	8.33	3.82	-6.64	19.27
4	4.96	—	5.93	—	—	17.84
5	12.51	—	4.36	—	—	23.60
6	8.63	—	6.66	3.35	—	19.60
7	3.86	3.94	6.18	9.34	—	14.74
8	—	—	7.21	8.83	—	15.81
9	4.05	—	9.34	7.01	—	11.55
10	—	—	6.37	5.97	—	12.03
11	—	—	5.62	—	—	12.26
12	16.10	—	5.50	3.03	6.70	11.69

注) 決定係数0.5未満の値は、傾向不明として「—」で示す。

地へ次の3点を提言することができる。①岡山市場は関西・東京市場と比べて取扱数量の増加により単価が下がる傾向の品目が多く、出荷集中によって供給過剰になりやすい状態にあると考えられる。したがって、品目によっては出荷期間の延長や他市場への分散出荷などで対処していく必要がある。②関西市場の特化傾向は東京市場と岡山市場との中間であると考えられる。したがって、岡山県内の産地が今後関西市場への出荷をめざす場合に

は、このような性格を十分把握して対応していく必要がある。③主要切花を種類別に分析した場合、キク・スプレー、カーネーション・スプレー、洋ラン類のデンファレなど取扱金額の増加が著しい種類は県内産供給率が低い傾向にあり、産地としての対応の遅れがうかがえる。岡山県の花き産地は生産が零細で個人選別・個人出荷が多いといわれているが、競争に打ち勝つために産地としてまとまって迅速に対応する必要がある。

第11表 洋ラン類の取扱数量が単価に及ぼす影響 (1984～1989)

月	オンシジューム		カトレア		コチョウラン		シンビジューム		デンドロビューム		デンファレ	
	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数	弾性値	相関係数
合計	0.18	(0.51)	-0.32	(-0.55)	-1.24	(-0.93)	-0.28	(-0.17)	-0.95	(-0.99)	0.11	(0.46)
1	-0.23	(-0.77)	0.06	(0.19)	-1.10	(-0.97)	-0.21	(-0.44)	-0.92	(-1.00)	-0.17	(-0.62)
2	-0.09	(-0.27)	-0.10	(-0.49)	-0.91	(-0.97)	-0.28	(-0.72)	-0.96	(-0.99)	-0.19	(-0.58)
3	-0.15	(-0.27)	-0.28	(-0.85)	-0.91	(-0.92)	-0.13	(-0.21)	-0.82	(-0.89)	-0.05	(-0.22)
4	-0.24	(-0.23)	-0.50	(-0.95)	-1.03	(-0.89)	-0.62	(-0.88)	-0.75	(-0.99)	-0.02	(-0.13)
5	-0.21	(-0.28)	-0.49	(-0.88)	-0.73	(-0.87)	-0.69	(-0.79)	-0.98	(-0.95)	0.02	(0.23)
6	-0.36	(-0.58)	-0.02	(-0.02)	-1.12	(-0.90)	-0.58	(-0.80)	-0.93	(-0.99)	0.11	(0.50)
7	-0.29	(-0.60)	-0.51	(-0.80)	-1.19	(-0.87)	-0.30	(-0.53)	-0.58	(-0.95)	0.12	(0.36)
8	-1.14	(-0.87)	-0.64	(-0.73)	-1.08	(-0.92)	-0.87	(-0.84)			0.59	(0.77)
9	-0.65	(-0.80)	-0.83	(-0.84)	-0.54	(-0.43)	-0.83	(-0.86)			0.63	(0.74)
10	-0.47	(-0.84)	-0.80	(-0.80)	-1.22	(-0.89)	-1.27	(-0.98)			0.31	(0.38)
11	-0.35	(-0.60)	-0.20	(-0.23)	-1.40	(-0.94)	-0.51	(-0.92)			0.03	(0.06)
12	-0.17	(-0.38)	-0.13	(-0.20)	-0.57	(-0.59)	-0.58	(-0.54)	-0.96	(-0.93)	-0.10	(-0.19)

摘 要

岡山県花き生産振興計画に取りあげられている主要切花品目(13品目)を対象に岡山市場におけるそれらの需給動向を関西・東京市場と比較検討するとともに、基幹4品目について形態・花色で分類してそれぞれの傾向を分析した。

1. 岡山市場は関西・東京市場と比べて①切花総取扱金額の伸びが小さく、大きな伸びを示す品目が少ない②特化品目が少ない③取扱数量の増加により単価が下がる品目数が多い、などの特徴を示した。

2. 岡山市場と東京市場は互いに反対の特化傾向を示す品目がみられた。一方、関西市場の特化傾向は東京市場と岡山市場の中間の性格をもっていると判断された。

3. 岡山市場において取扱金額の伸び率が大きい品目はトルコギキョウ、スターチスであり、取扱数量の増加によって単価が下がる傾向がみられない品目はバラであり、これらの品目は今後も安定した需要が期待できると判断された。

4. 岡山市場のキクについて、大輪・白、大輪・黄は周年安定供給されているが需要が限界に達しており、むやみな出荷量増加をしないこと、スプレーは県内産シェア拡大のために周年安定供給を行うことが課題になると考えられた。

5. 岡山市場のカーネーションについて、大輪・赤は特に5月において需要の限界に達しており、むやみな出荷量増加をしないこと、スプレーは今後の需要の伸びが期待でき、県内産供給率の向上を図るべきであると考えられた。

6. 岡山市場のバラについて、大輪・赤、大輪・ピンクは今後も安定した需要が見込められると思われ、県内産供

給率をより向上すべきであると考えられた。

7. 岡山市場の洋ラン類について、デンファレとコチョウランはともに取扱金額を順調に伸ばしているが、コチョウランは需要が限界に達していると思われ、むやみに出荷量を増加させないこと、デンファレは今後も需要の伸びが期待できるので県内産供給率向上させることが課題になると考えられた。

8. 以上の分析から県内の産地は以下の3点に留意して対応すべきであると判断された。①岡山市場は関西・東京市場と比べて出荷集中による供給過剰になりやすいと考えられるので、品目によっては出荷期間の延長、他市場への分散出荷などで対処すべきである。②関西市場の特化は東京市場と岡山市場の中間の性格をもつと考えられるので、関西市場への出荷をめざす場合には考慮して対応すべきである。③主要切花品目を種類別に分析した場合、取扱金額の増加が著しい種類は県内産の供給率が小さい傾向にあり、産地としての迅速な対応が望まれる。

引用文献および資料

1. 岡山県農林部(1989) 岡山花物語, 83pp.
2. 吉田徹生・原田賢文・橋田清治・納戸 勝・小代文明・松野孝敏(1985) 花き流通の情報化と技術的対応〔1〕～〔5〕, 農業および園芸, 60: 701-705, 806-812, 934-940, 1051-1056, 1172-1180.
3. 鶴島久男(1988) 花卉園芸ハンドブック, 養賢堂, 東京, 777pp.
4. 岡山市中央卸売市場(1984-1989) 市場年報(花き部).
5. 社団法人日本花き卸売市場協会(1986-1989) 昭和61～平成元年度花き市場流通調査報告書.